

【Galeria Clasico】2019年12月クリスマス・エントランス特別展示

記入：2020年4月13日 小林 朋子

【Adorazione dei Magi：東方三博士の来訪】

- * Sandro Botticelli：サンドロ・ボッティチェリ 作
- * 1475年頃 111x134cm テンペラ画
- * フィレンツェ ウフィツィ美術館 蔵

クリスマスはキリスト教の祭事で、“人類の救い主”とされるイエス・キリストが生まれた日とされています。その日が12月25日に決められたのは325年ニケア公会議で、実際はわかりません。この日がだいたい『冬至』に当たり、この翌日から太陽の照る昼間の時間が長くなってゆくことを、人類に救いをもたらすイエスに重ねたのでしょう。イエス誕生の場面は、ルネサンス時代のほとんどの画家が必ず描いていますが、聖書にはマタイとルカの福音書にわずかに数行しか書いてありません。特に【東方三博士の来訪】に関しては、マタイにしか書いてありませんが、とても大事な“出来事”としてたくさんの絵画の題材になっています。

『イエスはヘロデ王の時代に、古代ローマの人口調査のために故郷に帰る途中のベツレヘムの厩で生まれました。そのとき天に“人類の救い主”が生まれた兆候を見つけた東方の三人の占星術の博士（メルヒオール、カスパル、バルタザール）が、その星に導かれて誕生12日後にイエスに会いにやってきた。彼らは贈り物に“黄金”“没薬”“乳香”を捧げ礼拝した。』

このボッティチェリの【東方三博士の来訪】はこの絵の注文主の名前から【ラーマ家の東方三博士の来訪】と呼ばれ、当初はフィレンツェのサンタ・マリア・ノヴェッラ聖堂内のラーマ家の個人礼拝堂に飾られましたが、現在はウフィツィ美術館に所蔵される重要な一枚です。

ルネサンス時代はよく、絵を注文した人やその時代の権力者や有名人を絵の中に描き込みました。この絵の右肩には注文主の銀行家ラーマ、そしてこの時代フィレンツェの大富豪で大権力者の老コジモと二人の息子は主人公の東方の博士として中央に、さらに孫でフィレンツェを華やかなルネサンスの街にするロレンツォ・マニフィコもいます。作者のボッティチェリも右端でこちらを見えています。この絵より前に描かれた【東方三博士】の絵画は皆、イエスと博士たちの行列が側面から見たように同じ立ち位置で描かれていましたが、ボッティチェリは初めて、博士たちより高い位置にいるイエス達を正面両脇から博士たちが囲むように『三角図法』というルネサンスに好まれた構図で描きました。以来、聖家族や三博士はこの『三角図法』で描かれるようになる、これはとても記念的な絵なのです。

12月になると街はイルミネーションが輝きクリスマスムードになりますが、それはここ100年ほどの風景。キリスト教で最も大事な日は、イエスが生まれた日ではなく、復活した日『イースター』と、イエスが“人類の救い主”として公にこの三博士に会った日で、誕生日はほとんど祝われませんでした。

この【東方三博士】がイエスにあった日を『Epifania Domini』（エピファニア・ドミニ：ラテン語）（エピファニア；イタリア語、エピファニ：フランス語）とって、今でも大事な行事が執り行われ、これが

終わるとクリスマスシーズンが終わりツリーなどを片付けるのです。例えば、この日にフィレンツエではルネサンス時代の服装で盛大な三博士のパレードやミサがあります。善い子には、三博士が旅の途中で泊まった宿屋のおばさんからお菓子が配られるベファーナという習慣もあります。フランスではこの日に『ガレット・デ・ロア』という王冠を載せた大きな丸いケーキを食べます。この中には『フェブ』という小さな陶器のおもちゃが一個入っており、切り分けた自分のケーキの中にこれが入っていると一日王様になれることになっていて、フェブは子供たちのコレクションになります。

また、クリスマスの厩の置物（プレゼピオ）は、最初飾る時にはこの三博士と一緒に飾りません。三博士は12日目の『エピファニア』の日にたどりつくように、毎日子供たちがおうちの中を移動させるのです。

クリスマスは年末の楽しい行事ではありますが、本来は宗教行事。その元々の意味も知っていません。

ところでこの三博士は、東の果ての国からきてイエスに贈り物をしてすぐに帰ってしまいました。いったいどこから来たのでしょうか？誰だったのでしょうか？なぜイエスの誕生に東の人が祝いに来たのでしょうか？これはとても不思議なお話なのです。